

書店大商談会で酒井氏が講演

「それでも紙の本生き残る」

実業之日本社から刊行の

「脳を創る読書―なぜ『紙の本』が人にとって必要な

のか」の著者、酒井邦嘉氏が

が十月十一日、東京・西新宿のベルサール新宿で行われた第三回書店大商談会の



トークイベントで講演した
写真。

酒井氏は現在、東京大学
大学院総合文化研究所の教

授。著書「脳を創る読書」
は身近な事から言語の役割

を考え、読書が脳に与える
影響を考察。読書の在り方

を専門の言語脳科学の研究
から紹介している。当日は

テーマを「『脳』と『読書』
の古くて新しい関係とは？
それでも『紙の本』は生き
残る」として、言語の果た

す役割や、言葉によっても
たらされる思考やイメー
ジ、紙の本の重要性につい
て話した。

酒井氏は「(著書は)も
ともと読書好きに読んで貰
いたくて書いたが、人気が

なり今では四刷。書店では
自己啓発や自然科学のコー
ナーにあってノンジャンル

の扱い。都立中学の入試で
本文から抜粋した問題が出

たり、大学の歯学部で丸々
出題されたりで、とくに中

学の入試では小学生には難
しい問題だった。出題がし
やすいせいだと思うが、内
容は極めて常識的なことを

述べている。今は電子化が
多方面で進み、出版の世界
も影響が大きい。電子化

(電子本)は紙の本が主体
の出版の一部で、全ての本
が電子化されるわけがな

い。紙と電子書籍はどちら
が優位というより、この包
含する関係と言える。この

包含の関係をヒトの脳、
心、言語(言葉)に当ては
めると、まずヒトの脳の中

に心の領域があり、さらに
心の内に言語がある。脳が

心より大きいのは心とは関
係のない呼吸をつかさどる
脳神経の働き、心が言語よ

り大きいのは心の現象であ
る夢、言葉で言い尽くせな
い感動があることから理解

できる。互いに包含する関
係のうち言葉は心を介して
脳に伝わり、ヒトはより深

く考えることができる。そ
してヒトは能動的に考えを
言語にすることで他者との

議論を深めていく。本は言
葉を介して考えを伝え、言
葉が心によって支えられて

いることから、伝わる情
報、感激は高次元に届く。
紙の本は電子に比べ脳に具

体的なイメージをより強く
与え、憶えたことや読書の
履歴がより強く心に刻ま

れ、記憶として残すことが
できる。子どもたちと電子
書籍をめぐっては、教育と

いう独特の問題があり、長
期にわたる影響を見る必要
がある。かつて、ゆとり教

育が、言い出した人の根拠
と効果を検証しないまま、
長年続いてしまったよう

に、デジタル教育にも教育
効果の検証の点で危機意識
を持つべき。本には我々の

文化を次の世代に継承する
使命がある。本が売れなく
なり、電子化で勝手にダウ

ンロードされることが横行
すれば作家は居なくなる。
問題意識を持つ事が必要で

一つの解決は書店にたくさ
んの人が行くこと。書店の
側も、本を売るだけでなく、

著者と読者の対話の機会を
つくる、作家の素顔を広め
多くの人の好奇心を喚起

し、本を通じて、いろいろな
世代の人をつなぐことが、
教育にもなる」と話した。